

## 赤ちゃんポストと緊急下の女性 —未完の母子救済プロジェクト—



■柏木恭典著  
■北大路書房  
■2013年初版  
■2,400円(税別)

本書は2006年に設置された熊本慈恵病院の「赤ちゃんポスト」について、これまでの議論や内外の詳細な文献研究及び実地調査を踏まえ、「赤ちゃんポスト」が投げかけた根深きな問いに根柢した意欲である。「育児放棄族長論」などの感情的批判の無意味さは勿論のこと、社会福祉・児童福祉や社会的養護の法体系や理論的視点の限界も考えさせられる。「赤ちゃんポスト」が「子どもの福祉を守るのか、権利を侵害するのか」の論争を一例としても、解が明次ではないグレイゾーンであるかゆえに徹底した議論の必要性を随所で述べている。

妊娠も出産も匿名にせざるを得ない「緊急下の女性」とその子を守り抜こうとする筆者の視点の温かさと強靭さが心に深く残る。窮屈で1970年代当初に発生した「コインロッカーベビー事件」当時は、母親批判一色であった。「赤ちゃんポスト」を風化させる日本社会の体質の不变さに愕然としつつも、一方で本書のような研究が世に出されたことは感激深く、この40年余りの間の確かな歩みに喜びを覚える。親と子

の福祉は誰が、いかに守るべきか、子育て支援が社会保障の根幹として國の重要施策の一つに掲げられた今、本書多くの人に読んで欲しいと願う。

■大日向 雅美（東京女子大学大学院平和学研究科教授／NPO法人あいぱーどステーション代表理事）

### 緊急下の女性

「赤ちゃんポスト」にわが子を匿名で預けることを望む女性を意味するドイツ語圏の用語。このような女性は、厳しい生活環境や社会経済的状況下におかれ、親族や社会的ネットワークからも孤立し、妊娠出産を隠し、生まれてきた子の育児に窮屈して、遺棄したり殺害せざるを得ない危険性が高い。また、適切な医療も受診できず、母子共に心身の状態の危険性が高く、救急の緊急性も高い。「緊急下の女性」への支援は、「赤ちゃんポスト」の問題に留まらず、人が生きて行く上で遭遇するリスクをいかに支え合えるか、社会のあり方そのものを問いかけていくべきである。

## 日本の「ゲイ」とエイズ —コミュニティ・国家・アイデンティティ—



■新ヶ江章友著  
■青弓社  
■2013年初版  
■4,000円(税別)

エイズをきっかけとして、日本における「ゲイ(男性同性愛者)」という主体がどう立ち上がってきたのか、エイズというレンズを通して形成されてきた知とは何かという問い合わせを収め、厚生省(当時)資料からゲイ雑誌の投書欄に至る膨大な資料と関係者へのインタビューを横糸に紡がれた本書は元々、筑波大学大学院から博士号(学術)を授与された学位論文である。著者は、医学と社会学を横断する異分野融合型の新しい世代の研究者である。

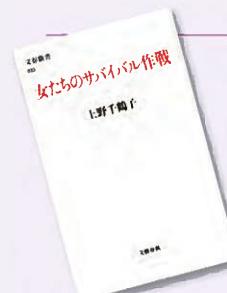
社会的に不可視化され、隠れ化してきた日本の男性同性愛者は、エイズ対策を推進する主体へと変貌を遂げてきた。しかし、人類学的「反省」の視点で現場を検証しようとする試みにおいて、「ゲイ・コミュニティ」が公衆衛生の悪徳を構築的に取り込む過程で当事者間における差異化を生み、健常な主体でない者たちが沈黙させられていった様を著者は描き出している。論文として発表された当初、こうした批判的分析が現場の反発を招いたことは想像に難くない。しかし、7年という歳月を経て、学際色豊かな経験を構成

に加えて大幅に修正・加筆されており、本書から伝わってくるのは当時と変わらぬ著者の信念である。そこにはます敬意を表したい。そして、国家と日本の「ゲイ」の権力関係が明らかになった先にある、エイズ対策の未来に期待している。

■東 優子  
(大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類教授)

### エイズ対策

日本のエイズ対策は、感染症法に基づき作成された「エイズ予防指針」に沿って講じられている。2011年に改訂された指針では、個別施設層に対する検査の実施、NGO等との連携の重要性などが明記されている。よりきめ細かな施策の実施が必要とされる個別施設層については、これまでの青少年や外国人、同性愛者や性風俗に係る人々のほか、薬物乱用者が追加された。



■上野千鶴子著  
■文藝春秋  
■2013年初版  
■800円(税別)

## 女たちのサバイバル作戦

本書は近年、女性の働く場が、男女雇用機会均等法の成立と関連して、どう変わってきたかを明らかにし、女性たちが生き抜いていくには、國家・企業・個人レベルで、どのような変革が求められるかを提起した関係者必読の書である。

日本の男女平等政策は、ネオリベ改革の中で進めてきた。少子化が進展し、労働力不足が予想される状況で、「女にも働いてもらおう」には機会の均等は必要だが、競争により優劣が生じるのは当然であり、結果平等を保証するものではない。男仕立ての競争ルールに適用できる女性は機会の均等が図られるべきではあるが、結果的には、疲弊する総合職と行き詰まる一般職、将来の見えない派遣社員や非正規労働者を多数つくり出した。今後、女性が働きやすい社会にしていくには、労働時間の終量規制や同一価値労働同一賃金といった政策や、画一的な働き方を余儀なくする日本型雇用慣行を修正し、「ひとりダイバーシティ」を実現していく必要があると指摘する。

本書の主張は著者の40年の研究と豊富な実体験

に裏付けられ、歴史の生き証人として、データを活用し、多くの研究の有益性と限界を提示することで問題の眞面目に迫る。巧妙かつ歯切れの良い著者の語り口調は、本書を一層魅力あるものに仕立てている。

■樋口美雄(慶應義塾大学商学部教授)

### ネオリバ

ネオリベラリズム、新自由主義のこと。市場原理主義とも呼ばれ、市場による自由競争が最も効率のよい資源配分を達成するとし、競争を制約する規制を緩和しようとする立場。公正な競争を通じて優勝劣敗が決まり、勝者は報酬を受け取り、敗者は退場していくのが競争のルールであるとする。不況や失業など、市場経済の限界があらわになる中、国家が財政支出により市場に介入する必要があるとするケインズ政策が重視されようになったものの、これに対し日本でも中曾根政権のころから「小さな政府」を唱えるネオリベ改革が進められたようになった。

## 女性画家 10の呼び方



■堀尾真紀子著  
■岩波書店  
■2013年初版  
■820円(税別)

「たくさんの人と出会い、さまざまな体験を重ねて想像力を豊かにすること」——本書はその大切さを10人の女性画家の人生と作品を紹介することによって詮りかける。19~20世紀にかけて生きた10人は国籍も環境も異なるが、共通するのは時代が育んだ強烈さである。美術教育からの排除や家族の猛反対に加え、生活困窮、身体障がい、政治的迫害、あるいは女神化などさまざまな困難にも関わらず、自分を表現し続けた女性画家たち。その体験は決して一概ではない。

戦争体験もさまざまである。息子や孫息子を戦死で失ったケーテ・コルヴィッツと、軍部に協力的だった両親の庇護のもとで戦争末期に姦淫な満州旅行に行ったり、いわきちひろの戦時体験は異なるが、戦後のちひろはその事実を見直し社会の仕組みに厳しい目を向けていくようになった。

また、これら10人の女性画家たちの絵画は見る人を不安にさせる。三岸節子が描いた、初々しさと不穏な髪を併せ持つ19歳の自画像と晩年のさくらの大木は、因習に挑戦する人を励まし、年老いた女性への偏見を覆すだろう。

見る人を不安にさせ、それまでの認識の枠組みの変革を迫る数々の絵と女性画家の生き様を紹介する本書は、10代に限らず年齢を超えて楽しめるところである。

■北原 恵(大阪大学大学院文学研究科教授)

### 女神(ミューズ)

女性画家はどのような存在として語られてきたのか? 若い女性は、まずその容姿(美貌)と、巨匠との性的関係性によってゴシップの扱いを受けてきた。既存の価値観からの解放を目指したはずの男性シュルレアリストたちは、それを「女神(ミューズ)」として概念化した。若い女性の無邪気さ(=ファム・アン・ファン)に価値を置き、自分たちの創作に靈感と活力を与える「女神(ミューズ)」として崇めたのである。それが社会では「褒め言葉」と見なされているだけに、自ら主張的な表現者であろうとする女性を内外から繰り付け苦しめる。その構造は今の社会にも生きている。